競技を通して広がる交流の輪

都城市パークゴルフ交流大会

高崎パークゴルフ場で12月26日、都城市パークゴルフ交流大会が開催されました。日ごろの練習で磨いた技術を競い合いながら交流を図ってもらおうと、夏と冬の年2回行われているこの大会。今回も、初心者から上級者まで楽しめる高低差のあるコースに、県内外の愛好者ら122人が挑戦し、声を掛け合いながら和気あいあいとプレーしていました。本薗篤則さん（高崎町）は「パークゴルフは健康維持と友達づくりには最適。今後もずっと続けていきたい」と笑顔で話していました。

銀メダリストと一緒に走り初め

新春初詣健康マラソン大会

山之口町の歴史と文化に触れながら早春の走り初めをする新春初詣健康マラソン大会が1月2日、安楽寺を発着とする5・5キロのコースで開催されました。30回目の今年は、メキシコ五輪銀メダリストの君原健二さんを含む350人が参加。選手たちは、コース途中の的野正八幡宮で今年1年の健康を祈願した後、熊野神社までのタイムを競い合いました。川越裕斗さん（小林市）は「毎年の家族の恒例行事です。みんなで走って、気持ちよかった」と息を弾ませていました。

市場から不況の風を吹き飛ばせ！

平成22年取引業務始め式（初競り）

野菜や水産物の生鮮食品などを取り扱う公設地方卸売市場で1月5日、取引業務始め式が行われました。長峯市長が「市民の台所である市場から景気を良くしていきましょう」とあいさつ。続いて市場協力会の小倉副会長の音頭で三本締めを行い、市場取引の活性化と1年間の無事故を祈願しました。競りが始まると、長引く景気低迷を吹き飛ばそうと威勢のいい掛け声が飛び交い、4キロの鯛に2万円、20束の春菊に1万円、イチゴ1箱に1万円とご祝儀価格が付き、場内を沸かせていました。

立ち上がる炎に無病息災を祈願

オネッコカッコ

孟宗竹などで作ったやぐらに正月のしめ飾りや門松を敷き込んで燃やし、竹のはじける音で鬼（災厄）を追い払うという「オネッコカッコ」が1月7日夜、市内各所で行われました。高城第9区自治公民館では、地区の子育連が中心となって組み上げた高さ10メートルほどのやぐらに、数えで7歳になる地区の子ども6人が点火。勢いよく上がった炎が赤く夜空を染めました。清水安次館長は「一時途絶えたものを復活させ続けてきた伝統行事。若い人に引き継いでいってもらいたい」と話していました。

モグラ退治に参上！　五穀豊穣を祈願

もぐら打ち

五穀豊穣を願う「もぐら打ち」が1月9日、山田町の竹脇地区で行われました。束ねたわらを地面に打ちつけ、農作物に害をもたらすモグラを追い払い豊作を祈願する正月の伝統行事。地元の小学生29人が、保護者らと一緒に作ったわら束を持って「もぐら打っが来たど」とはやし唄を歌いながら、地区内の家々の庭先や畑をたたいて回り、そのお礼に家人から菓子やもちなどをもらっていました。楽しみに待っていた藤森マサ子さんは「今後も伝統を守っていってほしい」と願っていました。

私たちが今年も都城を守ります！

平成22年都城市消防出初め式

平成22年都城市消防出初め式が1月10日、沖水川市民緑地で行われました。各地域の団長を先頭に、消防団員963人が分団ごとに行進。市長や区長から服装や規律などの点検を受けた後、団員らは車両70台による一斉放水を披露しました。また、式典の最後には親子団員の表彰や団員を支える家族に対する感謝状などの贈呈も行われました。お父さんの勇姿を一目見ようと訪れた米満美咲希さん（高城町）は「消防車から赤や青の水が出てきて、虹みたいだった」と目を輝かせていました。

いざ！　鍋合戦都城冬の陣

みやこんじょ鍋合戦

食料生産基地都城にふさわしい名物鍋を決めるみやこんじょ鍋合戦が1月10日、都城ぼんち市会場で開催されました。都城にあるもの活用協議会が昨年11月に呼び掛けたところ、都城の農畜産物を使った鍋、32点の応募があり、その中から事前審査を通過した3つの鍋を会場を訪れた家族連れなど200人が試食、審査しました。審査はそれぞれがおいしいと思った鍋に投票する方式で行われましたが、開票の結果いずれも甲乙付けがたいということで、3つの鍋とも最優秀賞となりました。

新春の都城路を駆け抜ける

都城市成人記念ロードレース

成人の日の1月11日、都城運動公園陸上競技場で成人記念ロードレースが開催されました。同競技場を発着する2キロ、3キロ、5キロのコースに、小学3年生から壮年までの518人が出走。応援に駆け付けた保護者らの熱い声援を受け、選手たちは新春の都城路を懸命に走りながら、ゴールを目指していました。初めて出場した吉川聡一郎くん（東小3年）は「一位でゴールできて気持ちよかった。今日が1個目のメダル。もっとメダルを取れるよう頑張りたい」と意欲をのぞかせていました。

人の風景

山之口麓文弥節人形浄瑠璃の発展に47年間

県文化賞「文化功労」部門受賞

村岡　純秋（すみあき）さん

県の文化向上発展に特に顕著な業績を残した人に贈られる県文化賞に、麓文弥節人形浄瑠璃保存会第10代語り太夫（たゆう）の村岡純秋さん（74歳・山之口町）が選ばれました。

人形浄瑠璃の操り手として24年間、また、語り太夫とよばれる物語の進行役として23年間にわたり、伝統芸能の発展に貢献したことが認められ、今回の受賞となりました。

戦争などでいったんは途絶えた人形浄瑠璃。大正10年ごろまで語り太夫であった坂元業衛（なりえ）さんの記憶をもとに昭和26年に復活し、その後地区住民による保存会が結成され、今日まで保存継承されています。

山之口町に伝わる人形浄瑠璃は、17世紀後半に大阪で太夫として活躍した「岡本文弥」が語る、哀愁をおびた独特の節回しで演じられます。台本には、譜面もなく「聞いて覚えるものだから」と、先代の太夫からは厳しくしごかれました。いつもは優しい師匠も人形のことになると途端に厳しくなって」と昔を思い出し苦笑いを浮かべる村岡さん。

そんな村岡さんも、今は教える側となり、後継者の育成にも力を注いでいます。その11代目語り太夫も昨年の11月の定期公演で初舞台を踏みましたが「まだ、8話あるうちの1話だけ。これから場数を踏んで学んで欲しい」と新しい太夫に向けエールを送る村岡さん。一方で、この語り口調が途絶えてはいけないと、独特の節回しを譜面にする作業も進めています。

将来に向けて「全国で4カ所しか保存継承されていない文弥節人形浄瑠璃。いつか、東京などの大都市で一堂に会した公演を開催したい」と夢を膨らませていました。

みやこのじょうさんか

都城讃歌

【我が心の故郷】

福重　正数さん

思い起こせば、都市生活では「遠くを見る」ことが少なくなってきていて、いつも忙しく過ごしているように思う。私が住んでいるさいたま市は、人口約120万人で東京まで電車で15分。冬のよく晴れた日には、冠雪の富士山がよく見える。大東京の先、はるか西の空の下に都城方面から眺める霧島が脳裏をかすめる。故郷を離れて42年が過ぎ、還暦を迎えた。親兄弟との離別や同級生の訃報（ふほう）を聞くにつけて、感傷的になり、我が故郷が涙の向こう側にかすんでしまう。

富士山がよく見える日は、見なければもったいない気がする。晴天の日でも見えたり見えなかったり、いつもよりくっきりと大きく見えたりと不思議である。

そういえば霧島も冬の寒い朝には、くっきりと見えた。日の出のつかの間にはピンク色に輝くことがある。日が高く昇るにつれて青みがかかり、やがてかすんで見える。そして太陽が西に沈み始めると夕焼けの中に赤いシルエットを見せる。日没後に葛飾北斎の版画のような黒霧島が浮かび上がる。富士山には日本人なら誰もが特別の感情を持つだろう。けれども、どこに住んでいようが私は、都城方面から見える霧島が心の故郷である。

福重　正数（ふくしげ　まさかず）

プロフィル

昭和24年生まれ。税理士、行政書士、社会保険労務士。現在、埼玉県で福重会計事務所を開業。都城市ふるさと納税応援団団員。

吉之元小学校

学校へ行こう

吉之元町4518　☎33－1800

「吉之元小学校の宝物」

6年　今里　奈々美さん
6年　丸山　吉之介（きちのすけ）さん
5年　田野　浩太郎さん
5年　冷水（ひやみず）　龍二さん

吉之元小学校は、全校児童14人のとても小さな学校ですが、明るくて元気な子どもでいっぱいです。目の前には霧島山が大きく見え、校門には季節ごとに色を変える学校のシンボルのイロハカエデがあります。

吉之元小学校といえば、アイススケートで有名です。校庭にあるスケート場は、日本で一番南にある天然のリンクですが、勝手に氷が張るわけではありません。保護者の人たちが、前日の夜の9時くらいに集まって、プールの水を機械でまき、深夜2、3時ぐらいまでかかって氷を作ってくれます。

次の日の朝は、氷を見てみんな大はしゃぎです。1、2時間目は体育の授業になり、たっぷり滑れます。上級生になると、みんなとても上手になり、低学年の子に優しく教えています。わざと転んだり、スライディングをしたりして、とても楽しいです。もちろん、みんな保護者の人たちへの感謝も忘れません。スケート場、そして、私たちの笑顔のために頑張ってくれる保護者の人たちすべてが吉之元小学校の宝物です。

吉之元小学校の子どもたちは、みんなこの学校が大好きです。いつまでも、この伝統を続けて欲しいです。

◎日本一南の天然リンク
「校庭のスケート場」
今年も、保護者の人たちが作ってくれたスケートリンクで元気いっぱい滑りました。
（写真は、1月14日の様子）